

No.19	高度化		
氏名	宮本 成生	スポーツ健康科学研究科	M2
1. 出願時のテーマ・目標を具体的に記述してください。			
鍼灸学に関する知的探求と地域医療への貢献～専門学生が学びを紡いで創る地域医療～というテーマで活動を行っている。本活動の目的は2つあり、1つ目は鍼灸の専門学生が鍼灸学の研究を通して、臨床と研究を繋げる機会を作り出すこと。そして2つ目は、他職種の現場で活動されている方と意見を交わすことと、地域住民の方に鍼灸をより認知してもらうことである。活動内容は、鍼灸の専門学生が臨床と研究を学ぶだけでなく、他職種の医療職と交流することで多様性を獲得することや、地域医療職の方に鍼灸を認知してもらうことで、より地域医療の輪が広がることである。			
2. 上述のテーマ・目標を実現するために実施した計画を具体的に記述してください。			
本活動に参加した専門学生は12名（19～45歳）である。参加者に対して、著名な先生をお呼びして研究のノウハウを伝えてもらったり、研究の基礎を学んで、アンケート調査や基礎実験を行うことで研究活動に触れてもらった。これまでに研究に触れたことのなかった学生達は研究とは何かを改めて捉えなおし、科学的にみることの重要性を理解することができた。具体的には、7月から活動を開始し、研究デザインや統計学の基礎、8月には計測器と測定、9月には実験計画設定、10月にはアンケート調査の実施、11月には基礎研究の実施をした。最後に年末年始で結果をまとめた。各専門分野の方から、多面的に指導を受けることで幅広い技能を身に付けることができた。			
5. 今回（今年度）の取り組みについて、今後の活動展開と展望を記述してください。			
今回の取り組みを通して、臨床に立つ人が研究活動を理解することの重要性を認識することができた。そして、研究を理解している人を増やすことで、鍼灸業界が抱えている「科学的根拠に欠けた治療」が解決できると確信できた。今後は、鍼灸の専門学校をはじめ、4年制大学の教職員の方々々と連携を通して、少しでも多くの鍼灸学生に研究活動について知ってもらい、体感してもらおうと考えている。また、説明能力やプレゼン能力も上げることができたので、より積極的に場に出て、自分の意見を発信していく。			
今回の活動では、地域の医療職と連携したディスカッションができなかったが、これは今後の課題として取り組んでいく。実際、鍼灸に興味を持ってきている医療職の方は少なくはないので、この活動を通してできた縁を切らさずに、次につなげていく。			
6. 今回（今年度）の取り組みは、今後の学びや進路にどのように影響しますか。			
自分は将来、大学の教員を目指している。そのため、人にわかりやすく伝えることや、研究の面白さや楽しさを伝えることが求められるが、今回の取り組みを経て、大きく成長できたと感じている。また、自身の研究に対する視野も広がり、これまでとは変わった「臨床中心の研究」を大事にしようと考えられるようになった。来年度から、博士後期課程に進学し、このまま研究活動を続けていくので、自分の研究成果をいかに分かりやすく伝え、それと同時に臨床に応用していけるのかを実践し続けていく。			
7. 今回（今年度）の活動が周囲に与えた影響（社会・周囲）への貢献・還元の点で記述してください。			
鍼灸の専門学校では、研究活動を行うことなく臨床へ送り出されている。また、鍼灸師の養成学校の9割以上が専門学校であるため、ほとんどの鍼灸師は研究活動を知ることなく、臨床に立っている。そのような現状もあり、鍼灸は「エビデンスに欠けた治療」と判断され、近年ではいくつかの医療ガイドラインから「鍼灸」の名前が排除されている。これは、鍼灸業界にとって大問題であると同時に、治療効果があるにも関わらず、「一般の方に受けてもらう機会が減っている」ことにもつながっている。以上の問題に対して、12名という少数ではあるが、本来ならば研究活動に触れることなく臨床にでていた専門学生に、研究活動を体験してもらうことができた。本活動に参加してくれた方々からは、「学会発表を必ずします」や、「臨床では、東洋医学とエビデンスを両方考えられるようにします」などと言った言葉をもらうことができた。本当に小さい一歩ではあるのだけれど、鍼灸業界の課題解決に向けて、1つの糸口となる活動を行うことができた。本活動の規模を広げていき、より多くの学生に研究を伝えていくことで、鍼灸業界の発展に寄与するとともに、日本の医療費の削減、健康寿命の延伸に貢献できると考える。			

3. 個人の成長の軌跡3-1. 取り組みの過程でどのようなことがあったのか、グラフを作成してください。	
3-2. グラフで書いた☆（個人がもっとも成長したと思うポイント）では、その過程で学んだこと、気づいたことについて具体的に書いてください。	
一人で活動を始めて、ほぼほぼ人脈がない状況からSNSを活用して、本活動を行うために必要な定員数まで集め切った。この経験は、今後の活動にかなり生きてくると感じている。また、定員に達した後、初めての講義では参加者の全員から「大満足」の評価を得ることができ、良いスタートを切ることができた。また、それだけでなく、研究についてを専門学生と学ぶ中で、自分自身にも足りない知識や技能、触れてない分野を改めて見直すことができ、充実した時間を送ることができた。学んだこととして、「研究」という言葉だけで多くの人が、「難しそう」や「自分にはできない」というイメージがあることを再確認したことである。誰もが小学校や中学校で自由研究をすと思われるが、その延長線上にあることを知ってもらうことが重要であると学べた。また、専門学生は学校で研究活動を行うことがないことも知れたので、今後の鍼灸業界の課題解決に向けて、積極的にこういった活動を増やしていこうと思った。	
3-3. “今回（今年度）の取り組み”と“正課の学びや取り組み”は、どのような関連や影響（相互作用）がありましたか？	
今回の取り組みでは、学校で研究活動をするのがない専門学生を対象として、研究活動を体験してもらうプログラムを実施した。その結果、自分にとって大きな成長が3つあった。1つ目が、研究活動を遠目に見ている鍼灸師にどうアプローチすべきかということである。研究は臨床と離れているという認識がある人が一定数いることがわかり、自分の今後の研究についても、この臨床と研究の結びつけをどう組み立てていくかを考える機会となった。2つ目は、専門学生に対して、いかに分かりやすく、そして入り込みやすい内容のスライドの作成を行ったことである。そして、実際にスライドを見せながら、わかりやすいか率直に尋ねることで、回を重ねる毎に自分自身のスキルも上がり、学生にとっても分かりやすいスライドが作れるようになった。そして最後が、運営力である。上記のグラフに示したとおり、自身の研究活動と並列してこの活動を行ったことで、自分自身のキャバが広がった。	
4. 本奨学金を受給したことで、以下の項目についてどのような影響を与えたか5段階で評価してください。（該当ナンバーに○） また、併せて評価の理由も書いてください。 評価例：【 1（達成できなかった） ← 3（どちらともいえない） → 5（達成できた） 】	
① 目標の達成度	4
<理由> 当初は最終ゴールを地域の医療職の方に研究成果を発表することと定めており、それが実現できる手筈を整えていたが、新型コロナウイルスの発生状況が変化の中で、日程的に厳しくなり、断念せざるを得なくなった。最後の発表は行うことができなかったが、目的の1つである「研究と臨床をつなげていくこと」は達成することができた。よって少し悔いが残るが、目的は達成できたので4である。	
② 計画の達成度	4
<理由> 計画は順調に進めており、自分でも予定通りに怖いくらいできていた。しかし、最後に予定していた医療職との交流だけ行うことができなかったことが悔やまれる。しかし、一人で参加者の募集から、講師の先生のブッキング、授業内容の提案・作成をこまめに計画通りに行えたことは、大きな成果であると考えている。よって、ゴールはし切れなかったものの、それまでの過程はよくできたので4である。	
③ 取り組みを通じた自己成長	5
<理由> 昨年は高齢者施設を回って、地域の方に鍼灸治療を無償で提供する中で、「一般の方に説明する難しさ」を痛感して、学びを得た。しかし、今年はその1つを上をいく、「説明する難しさ」を体験した。体のことは、ある程度は誰でも知っていて、入り口としてはそこまで難しくはない。一方で、研究のことを知っている人は当然多くはなく、前提知識を共有するところから始まる。その入り口で難しいとそっぽ向かれないようにするための創意工夫を学んだ。	
10. 今年度の取り組みを通じて最も身についたと思う力について、具体的に記載してください。9の設問で回答した力でも、それ以外でも構いません。	
① 身についた力	最も身についたのは、自己分析力です。
② ①で記述した力について具体的に説明してください	自己分析力というより、客観的視点に立つことが上手くなりました。それは自分を分析するだけでなく、人を分析することが得意になったことが最初であると感じているからです。本活動を通して、誰がどこまで理解しているかを常に観察し、同時にどうすれば理解してくれるのかを考える過程で、相手の分析と、自己反省能力が高くなったように思います。
③ なぜその力を身につけることが出来たのか、成長を手助け・促進させた要因を記載してください	本活動で伝えていた内容は決して簡単ではありませんでした。研究デザインや、統計学は特に難しく、どう伝えれば理解してもらえるかを暗中模索して、自分でも何度もプレゼン練習していきました。また、実際にプレゼンしている時は参加者の表情を見ながら、常に客観的に状況を把握して進行していたことが要因であると考えます。昨年の活動を通して、自分で精一杯にならなくなったのも成長を促進させた要因であると考えます。